

人間福祉研究
第5号/2002年度

夫婦の就寝形態について

— 住居内における個人の場との関わりで —

やまざき
山崎 さゆり

〈要 旨〉

本論では、夫婦の就寝形態と夫妻各々の個人の場をめぐる現状と意識に関して、その概略を掴むために実施した質問紙調査の分析結果を報告する。分析対象は女性301件のデータである。分析の結果、就寝形態はライフステージとは直接関連せず、同居の子どもの人数とのみ関連していること。一方、個人の場の有無・希望は、年齢階層や末子年齢階層等のライフステージ関連の項目と強く関わり、特に妻はライフステージ上昇と共に、読書や趣味のような自分の楽しみ場としてそれを求める傾向が強いこと。また、個室保有が夫婦別室就寝につながるのではなく、別室就寝が結果として個室保有につながること。別室就寝の夫婦生活に対する影響としては、性生活頻度、精神的親密度のいずれについても、影響があると考えられる者と無関係だとする者に二分され、これは現実の夫婦間の会話頻度と共に、実際の就寝形態に反映している可能性があること。などが判明した。

〈キーワード〉

夫婦関係、家族の個人化、夫婦寝室、個室

はじめに

本研究では、夫婦の就寝形態について、住居内における夫妻の個人の場（各専用の個室・コーナー）との関連で捉え、その実態を明らかにしようとしている。

これまで、就寝形態に関する研究は、夫婦関係というより親子関係に焦点が置かれた研究が中心であった。

1960年代のCaudill, W.らの研究では、日本の家族には親子同室就寝と夫婦別室就寝の寝方が習慣として存在し、これらの就寝形態は夫婦関係より親子関係、中でも母子関係が優

先された結果だとしている⁽¹⁾。また、森岡らも類似の調査を実施し、就寝形態を家族周期の観点から考察する中から、物理的に十分な部屋数が存在しても日本では親子同室就寝が生じやすいこと等を確認している⁽²⁾。

一方、篠田らは、それらの先行研究の知見を踏まえ、1984年以來就寝形態と家族関係について一連の研究を行い発表して来た⁽³⁾が、これらは研究対象から次の2つに大別できる。

一つは、乳幼児を持つ母親を対象とした調査研究である。そこでは、同室就寝時における家族員の位置関係、過去における就寝形態の変化を含めて、就寝形態と家族の心理的な関係との関連を分析している。その結果、就寝形態は親子関係・夫婦関係の心理的距離が物理的距離に反映された結果であり、これらは子どもの自我の発達や生活の自立の在り様とも関連している可能性があること。またこうした「家族の就寝形態の配置は、父親の寝る位置によって決まる」⁽⁴⁾としている。

もう一つは、某雑誌の既婚女性読者を対象とした質問紙調査結果の分析であり、対象者の年齢は22～74歳と、属性にばらつきがある。ここでは、新婚時から第1子20歳時までの就寝形態の変遷、新婚時・第1子誕生直後・1～3歳時の各々における就寝形態の選択理由、および現在の夫婦関係の類型化に要する設問⁽⁵⁾が中心である。その結果、子どもの成長と共に就寝形態は変更され、この変更に伴い新婚当初の親密な夫婦の関係が変化していくこと。また、夫婦共に相手を「最愛の伴侶」と感じる「伴侶型」と、そうでない「非伴侶型」では日常的交流における親密性に差異があり、前者の夫婦では、子どもの乳幼児期にも同室隣接型の就寝形態、後者の夫婦では、子ども誕生により夫のみ別室就寝であった場合が多いとしている。

以上に代表される研究の蓄積によって、就寝形態は、物理的な空間や家族員の増減によって変化するのみでなく、親子・夫婦の人間関係を反映しつつ影響を与えているであろうことが判明している。しかしながら、これらの就寝形態と家族関係との関連についての研究は、いずれも子育て期に分析の中心が置かれており、さらに、今日における家族の特徴的な動向の一つである家族の個人化⁽⁶⁾との関わりについての視点が見られない。

第二次世界大戦後、家制度が廃止され、急激な社会変動の中で核家族化・小家族化が進行し、1970年代後半以降には女性の社会進出の進行に伴って、妻の家庭外における行動範囲が拡大していった。こうした中で、現代日本の家族の基本的な動向は、①他の社会機関

(1) Caudill, W. & Plath, D. W. "Who Sleeps by Whom? - Parent - Child Involvement in Urban Japanese Families" (in) PSYCHIATRY, Vol. 29, 1966, P344-366

(2) 森岡清美「家族周期論」培風館 1973

(3) 文献1～7

(4) 文献7・P186

(5) 夫婦は互いにどのような存在（「最愛の伴侶」「子どもの父親（母親）」「一家の稼ぎ手」「役に立つ同居人」「やっかいな同居人」）だと思っているか、という質問。

(6) 家族の個人化とは「家族の集団生活の外部での家族成員の個人的活動領域の拡大、およびそれに伴う家族内部での生活分離の深化」森岡清美「現代家族の社会学」日本放送出版協会 1994.1 P163

との相互依存の拡大、②家族を支える絆としての情緒的結合の意義が増大、③家族の個人化の進展、の3つに集約できるという⁽⁷⁾。

本研究においては、このうち特に②と③、つまり、夫婦間における情緒的結合と個人化の進展の在り様が、夫婦の就寝形態や個人の場を中心とする住まい方と、どのような相互関係を持つのかについて探ろうとしている。

長津⁽⁸⁾は、夫婦間の個人化（個別化）を意識と行動の2次元から捉え、これと「夫婦の統合」（夫婦としてのまとまりの維持）との関連について分析した。そして、行動次元の個別化の傾向は、外出や就寝に特に現われ、食事には現われていないこと。夫婦の個別化志向性を高めるのは、妻の就業、家計運営方法の平等化、脱性別分業化の傾向であり、個別化志向性が高いほど夫婦の統合度が低いとしている。つまり、夫婦の共働き化・女性の経済的自立は夫婦の個別化志向性を高め、夫婦別室就寝はその顕著な現われの一つであるとしている。

しかし、このような結果・図式は、各行動の個別化、あるいは統合化の傾向を属性との関連で捉えた結果であり、あくまでも属性別にみた各行動別の傾向としてのみ言えることである。しかし、その個別化・統合化されている行動相互の関係、さらにはそれらの行動がなされる空間相互の関係について明らかにすることこそ、人間生活を全体として捉える上で重要なのではないかと考える。

かつて筆者は、生活時間調査データを基に、住居内の行動と空間の対応関係について分析を行った⁽⁹⁾が、その結論の一つとして、中高年以上の人々（社会的に第一線から退き在宅時間が長くなった男性、および子どもが既に独立している中高年女性）が創造的な趣味的活動に打ち込もうとした場合、当人専有の独立した個室を必要とする傾向があること等を明らかにした。しかし、そこでは就寝形態との関連については、結果として明らかにすることが出来なかった。本研究では、夫婦間の情緒的結合と個人化が、どのような行動として現象し、また空間的使い分け・場の設定としてなされているのか、について、就寝形態や個室等の保有状況に焦点を当てつつ明らかにしようとするものである。

一方、今日におけるライフサイクルの変化、平均寿命の延長と子どもの数の減少による子育て後の「空の巣」期の延長傾向の中で、「標準家族」で生活する期間（子育て期間）は相対的に縮小している。従って、本研究では、子育て後の中高年期に連なるものとして夫婦関係を捉え、その関わりで住生活の方向性を考えていくこととする。

中高年期の住生活に焦点を当てた研究としては、沢田による研究⁽¹⁰⁾が挙げられる。そ

(7) 森岡清美「現代家族の社会学」日本放送出版協会 1994.1 P162～163

(8) 長津美代子「中年期夫婦の個別化と統合」家族問題研究会家族研究年報 NO.18 P35～48 1993.3

(9) 山崎さゆり「生活時間に基づく住居内の行動と空間の対応関係に関する研究 その1～3」日本建築学会計画系論文集 NO.491.1997.1 NO.504.1998.2 NO.538.2000.12

(10) 沢田知子「熟年・高齢期におけるライフスタイルと住まい方の特徴 長寿社会におけるライフコースの充実・支援にむけた住宅計画 その1」日本建築学会計画系論文集 NO.547 P95～102 2001.9

ここでは、中高年期における住まい方の特徴の一つとして夫婦別室就寝を挙げ、「住戸全体が一体・開放化する中での、夫・妻の就寝分散あるいは行動拠点分散」であることなどを明らかにしている。本研究では、そのような住まい方の特徴が、どのような夫婦・家族関係の反映なのか、就寝形態と起床時間帯における個人の場の在り方とはどのような関係性を持つのかについて分析考察するものである。

今回は、その内、夫婦の就寝形態と個人の場をめぐる現状と意識について、その概略を掴むために実施した質問紙調査の結果を報告したい。

2. 結果と考察

2-1. 調査と分析対象の概要

主な質問項目は、就寝形態の「希望」(夫婦の寝室は同室⁽¹¹⁾と別室のどちらを希望するか)と「実態」(現在、配偶者と同室か別室か)、および各理由、就寝状況全般⁽¹²⁾、就寝形態は夫婦生活に影響を及ぼすと思うかどうか、夫婦の会話頻度、専用個室等での行動である。

調査対象は、訪問介護員養成研修2級課程受講者⁽¹³⁾、分析対象は女性301件⁽¹⁴⁾である。表1～5に基本属性データを示す。職業は「あり」154、「なし」147とほぼ半々である⁽¹⁵⁾。

表1. 基本属性の基本統計量

	件数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	変動係数
妻年齢(歳)	296	26	66	48.21	8.52	17.67
夫年齢(歳)	220	30	71	51.17	8.97	17.53
長子年齢(歳)	240	3	35	19.28	6.84	35.48
末子年齢(歳)	240	1	34	16.75	7.25	43.28
同居の子人数(人)	299	0	4	1.48	0.97	65.54

(11) 「同室」とは夫婦が同室で就寝すること。子等も同室か否かは区別していない。

(12) 熟睡できる方か、睡眠はとれているかどうか、配偶者の寝相は気になるか、配偶者と起床・就寝時間帯はずれる方か。

(13) 川崎市高齢社会福祉総合センター主催(8回分)、および調布学園短期大学主催(3回分)の研修受講者。調査日は前者が1999年7月、11月、2000年1月、7月、10月、2001年1月、5月、6月、後者が1999年9月、2000年2月、11月である。計11回の調査データは一括して扱う。同研修受講者を対象としたのは、かなり立ち入った調査内容のため事前に何らかの信頼関係の構築が必要であり、講義はその構築に寄与可能と考えたため。筆者担当の講義中の休憩時間に配布し同一日に回収した。

(14) 調査対象者には男性も含まれていたが、回収16票であり男女別の分析対象となり得ないと判断し除外した。但し、後に行ったヒアリング調査対象としては男性も含めた。

(15) 職種、勤務形態についての質問項目はないが、研修申し込み時データによると、職種はホームヘルパーが約半数、勤務形態では「パート」が9割である。

表 2. 夫妻年齢階層 (件)

年齢階層	夫	妻
39 歳以下	32	52
40～44 歳	57	42
45～49 歳		56
50～54 歳	56	71
55～59 歳	37	45
60 歳以上	40	30
不 明	81	5
計	301	301

表 3. 長子年齢階層(件)

14 歳以下	64
15～19 歳	59
20～24 歳	54
25 歳以上	63
子 な し	59
不 明	2
計	301

表 4. 末子年齢階層(件)

12 歳以下	70
13～19 歳	77
20～24 歳	52
25 歳以上	41
子 な し	59
不 明	2
計	301

表 5. 同居の子の人数(件)

な し	58
1 人	84
2 人	120
3 人以上	38
不 明	1
計	301

表 6. 就寝型 (件)

同一同	149
外一外	65
同一外	14
外一同	73
計	301

2-2. 就寝型の設定

分析に先立ち、就寝形態の「希望」と「実態」の組み合わせに基づく就寝型（「希望」が先で「実態」が後）を設定した。設定に当たっては、回答選択肢に「同室」「別室」に加えて「その他」を設けた結果、「希望」が「その他」が13件⁽¹⁶⁾発生した。そこで“同室希望か、同室以外でも良いか”を「同室」と「同室以外」(外)に置き換えカテゴリー統合を行った。表6はこの就寝型の分布である。

就寝型は同居の子の人数(子の数)と関連⁽¹⁷⁾し、子が0の場合「希望」と「実態」の一致が8割を超え、いる場合は「外一同」の割合が高い。「外一外」の割合が高いのは、子が1人以下である。

表 7. 就寝型別理由

(N=件数、複数回答)

就寝形態の理由	内 容	同一同		外一外		同一外		外一同	
		希望	実態	希望	実態	希望	実態	希望	実態
観念的理由	「夫婦は同室で寝るもの」「夫婦は一単位」「同室で寝るのが当たり前」「自然なこと」	18	34	0	0	0	0	0	8
異変時の対応	「夜中に起こる病気に早く気がつく」「睡眠中の健康確認が出来る」「具合が悪い時等、世話をしながら休める」	36	13	0	0	5	0	0	2
夫婦間コミュニケーション	「夫婦仲を深める」「スキンシップによい」「気持ち安らぐ」「互いの息遣いが感じられる」	59	24	1	0	4	0	1	1
住宅事情	「部屋数が少ない」「他に部屋がない」「子どもがまだ同居中で他に空室がない」	0	54	3	4	0	5	2	42
安眠欲求	「夜が遅かったりイビキ等で安眠できない」「一度寝そびれると寝付けない」「(別室だと)うるさくないから」	0	0	31	36	0	4	33	0
自律的時間欲求	「読書・ラジオ・テレビ等が自由」「精神的に自由な感じがする」「生活のサイクルの違いを尊重する」	0	0	34	25	0	2	26	0
受動的理由	「自分のイビキがきついため、妻が別室に」「相手の要望による」「相手の同意が得られない」	0	1	0	6	0	1	0	2
回答計		113	126	69	71	9	12	62	55

(16) 「どちらでもよい」9、「気分を変えたい」3、「暑い季節は別室にしたい」1。

(17) [] はカイ二乗検定結果。[***] は0.005、[**] は0.01、[*] は0.05で有意差あり。

以後の分析は、この就寝型を大枠として行う。

2-3. 就寝形態の理由

就寝形態の理由（自由記述）を整理した表7を見ると、実際に「同室」なのは〈住宅事情〉、次いで〈観念的理由〉が多く、「同室」希望の理由では〈夫婦間コミュニケーション〉と〈異変時の対応〉が多い。「同室以外」では、「希望」「実態」共に〈安眠欲求〉と〈自律的な時間欲求〉が主だが、〈住宅事情〉⁽¹⁸⁾も若干存在する。また、就寝型は「時間帯ずれ」⁽¹⁹⁾と関連し、「外—外」「同一—外」の8割強が「いつもずれる」「ずれることが多い」となり、〈自律的な時間欲求〉が「同室以外」の現実の理由であることが裏付けられる。

すなわち、子が少ないと〈夫婦間コミュニケーション〉や〈異変時の対応〉のための同室就寝か、〈安眠欲求〉または「時間帯ずれ」を尊重した〈自律的な時間欲求〉に従った別室就寝かを選択する。しかし、子が多いと、限られた住戸規模と〈観念的理由〉から、「同室以外」希望でも実際は夫婦同室就寝の形態を取る傾向がある。

2-4. 就寝形態と個人の場との関係

2-4-1. 個人の場の保有と保有希望

表8に、夫妻の個人の場の有無と妻の希望をまとめた。妻より夫で保有者が多く、妻はコーナーより個室希望者が多い。「妻の個人の場」対「夫の個人の場」^[***](表9)、「妻の

表8. 「個人の場」の有無・妻の希望 (N=件数)

	妻の個人の場	夫の個人の場	妻の希望
個室あり(欲しい)	64	91	162
コーナーあり(欲しい)	45	50	61
なし(いらない)	189	155	69
不明	3	5	9
計	301	301	301

表9. 妻と夫の個人の場 (N=件数)

妻の個人の場	夫の個人の場			計
	個室	コーナー	ない	
個室	45	9	8	62
コーナー	15	21	9	45
ない	31	19	138	188
計	91	49	155	295

(18) 「モノが多くて夫婦で寝る部屋がない」、「家族全員で寝られる大きさの部屋がない」

(19) 配偶者とは起床・就寝時間帯はずれる方か。4択。

個人の場合」対「妻の希望」は強く関連し、夫が個室保有の場合に妻の個室保有が多く、現に個室保有の妻は引き続き個室を希望する傾向がある。

「妻の個人の場合」は、年齢階層[***]、長子年齢階層[***]、末子年齢階層[***]、子の数[***]といったライフステージ項目と強く関連し、ステージ上昇・子の数減少に連れ個室保有者が増加、「ない」の割合が減少する（表10）。「夫の個人の場合」も、夫年齢階層[*]、長子年齢階層[***]、末子年齢階層[***]、子の数[**]と関連するが、ステージ上昇に伴

表10. 「妻の個人の場合」と末子年齢階層 (N=件数)

妻の個人の場合	末子年齢階層					計
	～12	13～19	20～24	25～	子なし	
個室	5	7	12	15	25	64
コーナー	9	10	8	9	9	45
ない	55	60	32	17	23	187
計	69	77	52	41	57	296

表11. 「夫の個人の場合」と末子年齢階層 (N=件数)

夫の個人の場合	末子年齢階層					計
	～12	13～19	20～24	25～	子なし	
個室	16	21	9	16	29	91
コーナー	10	11	11	8	10	50
ない	42	45	31	17	18	153
計	68	77	51	41	57	294

う個室保有者の増加はより緩やかであり、子が低年齢でも保有する夫が一定程度存在する。(表11)

一方、「妻の希望」は末子年齢階層[*]とのみ関連する。ステージ上昇に伴い希望者の割合が徐々に増加し、「25歳以上」の8割強が個室希望だが、子が「なし」⁽²⁰⁾では現個室保有者数をそれ程上回らない。「なし」の多くは就寝型と同様、現実希望通りと言える。

2-4-2. 個人の場合での行動

表12は、妻の個人の場合での行動、個人の場合を持たないが希望する妻がしたい行動、夫の個人の場合での行動の記入内容をまとめたものである。

個室保有の妻は「読書」「趣味」次いで「休息」「収納」が多く、コーナー保有者、個人の場合を持たない希望者が行いたい行動は「読書」「趣味」が多い。また、個室・コーナ

(20) 7割強が50歳以上。

表 12. 「個人の場」での行動

(N=件数 複数回答)

行 動	略語	妻現在		妻希望者		夫現在	
		個 室	コーナー	個 室	コーナー	個 室	コーナー
仕 事	仕事	12	6	8	5	26	20
勉強・思索・考え事	勉強	1	9	9	3	7	1
自分の物収納・着替え	収納	24	7	17	9	24	6
休息・睡眠	休息	27	3	16	1	39	5
趣 味	趣味	33	20	52	23	23	11
読書・テレビ・音楽	読書	36	20	45	17	46	22
パソコン・Internet	PC	4	2	4	2	20	10
接 客	接客	2	1	0	0	0	0
一人の時間を過ごす	一人	3	1	16	2	0	0
回答計		142	69	167	62	185	75

一の各希望者では、前者で「収納」「休息」「一人」が明らかに多い。一方、夫の個室保有者では、多い順に「読書」「休息」「仕事」「収納」「趣味」「PC」、コーナー保有では「読書」「仕事」が多く「趣味」「PC」も一定程度存在する。

つまり、妻の個人の場は主に「読書」「趣味」といった“自分の楽しみ”の場として考えられ、個室を求めるのは、一定面積を要する「休息」「収納」、そして「一人」のような隔離された空間への要求と言える。一方、夫の個人の場では、妻の場合に加えて「仕事」「PC」がなされ、「仕事」は「趣味」「PC」以上に多い。これは“夫は子が低年齢でも個室等を保有する”傾向を裏付ける理由と考えられる。

2-4-3. 就寝形態と個人の場の関係

表 13 は「妻の個人の場」と就寝型 [***]、表 14 は「夫の個人の場」と就寝型 [***] のクロス表である。実際に同室就寝では個人の場が「ない」が多く、「外一外」で個室保

表 13. 「妻の個人の場」と就寝型 (N=件数)

妻の個人の場	就 寝 型				計
	同一同	外一外	同一外	外一同	
個 室	24	29	3	8	64
コ ー ナ ー	19	9	5	12	45
な い	103	27	6	53	189
計	146	65	14	73	298

表 14. 「夫の個人の間」と就寝型 (N=件数)

夫の個人の間	就寝型				計
	同一同	外—外	同一外	外一同	
個室	30	43	6	12	91
コーナー	27	3	2	18	50
ない	88	19	5	43	155
計	145	65	13	73	296

有率が高い⁽²¹⁾。この傾向は前者が妻、後者は夫でより顕著である。一方、「妻の希望」と就寝型[*]では、同室以外を希望する型で個室希望の割合がやや高くなっていった。

つまり、個室保有が夫婦の就寝形態に影響すると言うより、同室以外の就寝形態を採ろうとすれば個室が必要となる、と言える。

2-5. 就寝形態と夫婦間交流の関係についての考え方

就寝とは、睡眠という生理的な欲求を充足する人生で最も長い時間であると共に、近い人同士が精神的・肉体的に接触することで、情緒的もしくは性的な交流を行う極めてプライベートな時間である。このような観点を外したままで夫婦の就寝形態を論じることは出来ないと考えた。そこで、就寝形態が夫婦間交流⁽²²⁾に影響すると考えているかどうか、についての質問項目を入れることとした。これらの質問文と単純集計結果は表 15 の

表 15. 夫婦間の交流関係等に関する質問項目と単純集計結果 (括弧内は件数)

<p><性生活頻度></p> <p>Q. 近頃“セックスレスカップル”(性的関係がない夫婦)が話題になっています。夫婦の寝室の形態はセックスの頻度に関係すると思いますか。</p> <p>①夫婦が別室で就寝する場合、同室の場合よりセックスの頻度は減ると思う (139)</p> <p>②夫婦が別室で就寝する場合、同室の場合よりかえってセックスの頻度は増すと思う (8)</p> <p>③夫婦の寝室の形態とセックスの頻度は関係ないと思う (144)</p> <p>④その他 (7) 不明 (3)</p>
<p><精神的親密度></p> <p>Q. では、寝室の形態と夫婦の精神的な面との関係について伺います。寝室の形態は、夫婦の精神的な親密感の度合いに影響すると思いますか。</p> <p>①夫婦が別室で就寝する場合、同室の場合より夫婦の親密感は薄くなると思う (129)</p> <p>②夫婦が別室で就寝する場合、同室の場合よりかえって夫婦の親密感は濃くなると思う。(11)</p> <p>③夫婦の寝室の形態と夫婦の精神的な親密感の度合いは関係ないと思う (145)</p> <p>④その他 (9) 不明 (7)</p>
<p><会話頻度></p> <p>Q. 現在、夫婦で一日 30 分以上会話をする機会はどの程度ありますか。</p> <p>①ほとんど毎日 (174) ②週 2～3 回位 (56) ③週 1 回 (26) ④月に 2～3 回位 (13)</p> <p>⑤話すことはほとんどない (30) 不明 (2)</p>

(21) この傾向は沢田らも「『別室就寝』の方が『自分専用の部屋』の保有率が高い」とし、その自室は別室就寝室と重複する機会が多いと指摘している。(沢田知子他「ライフステージの展開に伴う非標準世帯への移行からみた住戸計画その3 壮年・高齢期における私的行動拠点の形成」日本建築学会大会梗概集 E-2 P55～56 2001.9)

(22) 性的側面での夫婦間交流として「性生活頻度」、夫婦間の精神的親密感との関係として「精神的親密度」の設問を設けた。

通りである。

2-5-1. 就寝形態と性生活頻度との関係

全体では「別室だと減る」・「関係ない」に二分され、「性生活頻度」⁽²³⁾は、ライフステージ項目と関連していた。表16の年齢階層^(***)との関連を見ると、「関係ない」は55歳以上、特に60歳以上では9割を占め、高齢になるに従い無関係と考える傾向が強いと言える。

表16. 「性生活頻度」と妻年齢階層 (N=件数)

性生活頻度	妻年齢階層						計
	～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～	
減る	24	24	31	38	18	3	138
関係ない	25	18	22	27	23	27	142
計	49	42	53	65	41	30	280

2-5-2. 就寝形態と精神的親密度との関係

これも「別室だと薄くなる」と「関係ない」がほぼ半々であり、この傾向は就寝型による違いが見られた^(***)(表17)。「同一同」の7割弱が「別室だと薄くなる」と答えたのに対し、他の型では「関係ない」が多数である。つまり、就寝形態が夫婦の精神的親密度に影響すると思う人は、同室就寝にこだわり現実に同室で就寝するが、無関係と考える人は夫婦同室就寝にこだわらない傾向がある。

表17. 「精神的親密度」と就寝型 (N=件数)

精神的親密度	就寝型				計
	同一同	外-外	同一外	外-同	
薄くなる	88	15	5	21	129
関係ない	45	45	8	47	145
計	133	60	13	68	274

2-6. 就寝形態と会話頻度との関係

上記2設問では、就寝形態による夫婦間交流への影響についての考え方であったが、実際の夫婦間交流状況として、会話頻度についての質問項目(表15)を設けた。

「会話頻度」⁽²⁴⁾は、「ほとんど毎日」が全体の6割弱であり、「末子年齢階層」^(**)と関連していた。末子年齢上昇に連れ「ほとんど毎日」の割合が増加し、末子「25歳以上」と「なし」の7割以上が「ほとんど毎日」会話があるとす。また、就寝型とも強く関連^(***)

(23) 「別室だと増す」「その他」は少数のため、数量的な分析対象としては外した。

(24) 「会話頻度」のカテゴリ一度数の偏り軽減のため、「週1回」「月2～3回位」「ほとんどない」を統合した「週1回以下」のカテゴリを用い各項目との関連を検討した。

(表 18)し、同室希望の型で「ほとんど毎日」の割合が高く、同室以外を希望する型では「ほとんど毎日」の割合が低くなっていた。

表 18. 「会話頻度」と就寝型 (N=件数)

会話頻度	就寝型				計
	同一同	外-外	同一外	外-同	
毎日	111	24	9	30	174
週 2～3 回	20	10	3	23	56
週 1 回	8	8	1	9	26
月 2～3 回	3	7	1	2	13
ほとんどない	5	16	0	9	30
計	147	65	14	73	299

3 おわりに

以上の質問紙調査結果の分析から、夫婦の就寝形態と個人の場の現状と傾向についての概略を掴むことが出来た。今後は、ヒアリング調査結果を基に、それらの個々の傾向がどのように具体的に絡まって現実の生活として現象しているのか、を明らかにして行きたいと考えている。

【引用・参考文献】

- (1) 飯長喜一郎他『家族の就寝形態の研究』家庭教育研究所紀要 NO.6 P43～64 1985
- (2) 篠田有子『社会化過程の一現象としての就寝形態の研究』家庭教育研究所紀要 NO.8
P66～75 1987
- (3) 篠田有子他『家族の就寝形態の研究 そのⅡ—長子誕生からの10年間—』家庭教育研究所紀要
NO.9 P34～50 1987
- (4) 篠田有子他『家族の就寝形態の研究 そのⅢ』家庭教育研究所紀要 NO.12 P30～42 1990
- (5) 中野由美子『就寝形態と家族関係・子どもの発達Ⅱ—父子関係との関連を中心に—』家庭教育
研究所紀要 NO.13 P168～178
- (6) 篠田有子『就寝形態と家族関係の発達』家庭教育研究所紀要 NO.15 P63～74
- (7) 中野由美子『日本の家族の就寝形態Ⅰ 就寝形態と家族関係を中心に』目白学園女子短期大
学研究紀要 NO.34 P175～188
- (8) 森岡清美『現代家族の社会学』日本放送出版協会 1994.1
- (9) 森岡清美・望月嵩著『新しい家族社会学 三訂版』培風館 1994
- (10) 神原文子著『現代の結婚と夫婦関係』培風館 1994
- (11) Blood,R.O.,Jr. 著 田村健二監訳『現代の結婚—日米の比較—』培風館 1978